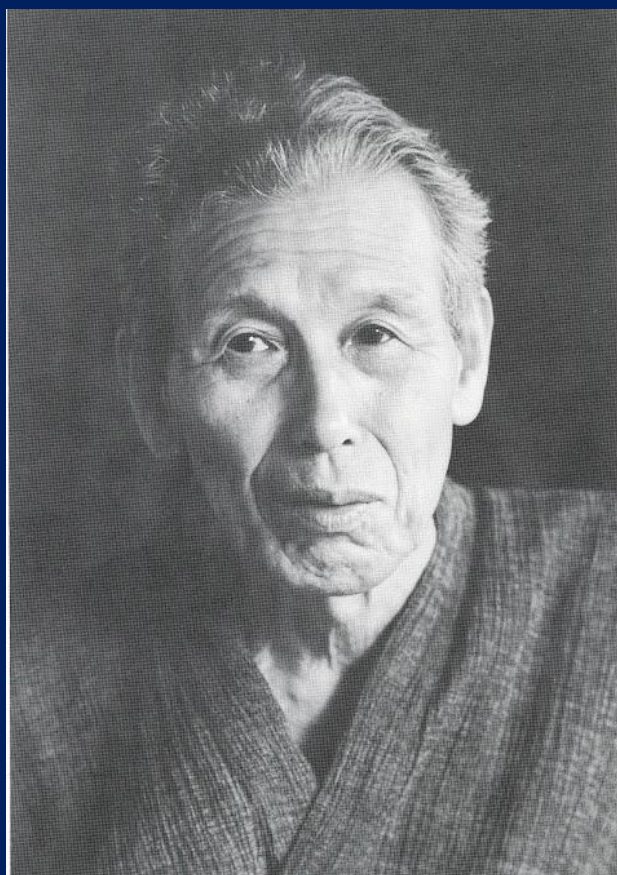


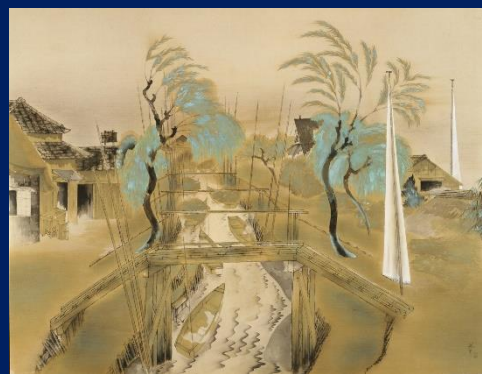
富取風堂～色彩の追求～ ラウル・デュフィの模写から



作家について

作品と模写

作家について



《葛西風景》1937年

富取風堂は、1892(明治25)年、東京都日本橋の塩ものの仲介商を営む富取近蔵の次男として生まれました。1905(明治38)年、松本楓湖の主宰する安雅堂塾に入門して日本画を学びます。1914(大正3)年、松本楓湖門下の今村紫紅や速水御舟らと共に赤曜会を結成します。赤曜会は保守的な日本画の旧弊と権威を打ち壊し、新時代の自由な芸術をつくり出すという自負をもって結束した研究団体で、短命でしたが日本画史に新鮮な刺激を与えた活動でした。この後には、院展を中心に作品を発表していきました。

富取は、初期は人物画や風景画も手掛けましたが、壮大な歴史画ではなく、どこにでもある身近な自然の中にこそ画題を見出して、独自の絵画的な世界を創出した花鳥画の名手としてとりわけ活躍し、初期の写実的な画風から、装飾性を加味した画風へと展開しました。

1924(大正13)年関東大震災を機に市川市に転居し、千葉県日本画振興に多大な功績を残しました。1948(昭和23年)千葉県美術会発足に関わり、1967(昭和42)年常任理事制度が生まれると、これに就任しました。当館では、千葉県にゆかりの深い作家として、52点の作品を収蔵しています。



《漁港の朝》1950年



《花》1953年

作品と模写

《晩秋》(図1)は、空が光を帯びて色を変える頃、画面を斜めに横切る土手には野の草が繁茂する様を描きます。色彩の効果が美しい作品です。

富取は温和な花鳥画の名手として、克明な観察に基づく素描をたゆまず描き続けました。温かい目で自然観察を行う一方で、日本画の可能性を拓げるような、西洋美術の研究を熱心に行う一面も持っていたことも注目されます。

当館は、富取の素描帖を数多く所蔵しています。ゴッホやセザンヌ、マティスらの西洋近代絵画の巨匠の模写が多く残されている中、特に注目されるのが、ラウル・デュフィの水彩の模写(図2)です。

デュフィは20世紀前半にフランスで活躍したフォーヴィスムに連なる画家で、明るい色彩と軽快な筆さばきで、南仏の風景や近代生活の諸相を描き、「生きる喜び」を表現しました。

深いブルーからピンクへと美しいグラデーションを成す背景に、イエローやオレンジで夕陽を浴びた野の草が軽快な筆致で描かれる本作品は、デュフィの影響が色濃く感じられます。画面全体で、色彩のバランスを試行錯誤した跡が、スケッチ(図3)に残されています。

手法的には前衛的な西洋美術を取り入れながら、主題はあくまで季節感ある花鳥の美しさを謳いあげ、常にオリジナルで、新しい日本画を追求していたと言えるでしょう。



図1 《晩秋》1955年



図2 デュフィの模写

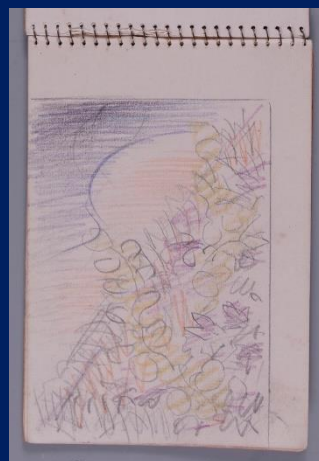


図3 《晩秋》のスケッチ